The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	民族から見る中国近現代史研究
Author(s)	田中, 仁
Citation	阪大法学. 2015, 65(1), p. 289-291
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

資料

民族から見る中国近現代史研究

田中　仁

近代内モンゴルの歴史は日本を抜きにしては語れない。二十世紀はじめごろからモンゴルは日本と深い関わりを持つようになり、とくに内モンゴル地域は日本と密接に連動するようになっていった。すなわち、すでに近代化が進んでいた日本は大陸進出を強め、内モンゴルの近代化に大きくかかわり、基本設備、教育普及、医療衛生、牧畜技術の普及等に努めた。しかし、日本の敗戦によって情勢は激変する。すなわち、内モンゴルは中国領内に留まり、モンゴル人たちが近現代において構築してきた歴史の連続がたち切られ、内モンゴルの行方も変更を余儀なくされた。

中国で少数民族の人口は漢民族の十分の一たらずであるが、少数民族地域は国土の六五パーセント以上を占めている。一九五〇年代以降、中国は、多民族国家である国民国家を統合する目的で、周辺の諸民族地域に民族区域自治制度を実施してきた。それから半世紀以上経つ今日、公的には「民族問題が解決された。もう民族問題は存在しない」とされる。ところが、いまの中国では却って民族問題が頻繁に起っているが、周辺の諸民族が受けた多様な影響が民族問題を起こす原因になっていると考えられる。

周太平・中国内モンゴル大学モンゴル学院教授（近現代史研究所所長）は、二〇一四年四月から一年間、中国政府から派遣され法学研究科に外国人招へい研究員として滞在された。同教授は一九六三年生まれ、中国内モンゴル自治区ジャライド旗出身のモンゴル人で、大阪外国語大学で一九九九年に修士の学位を、二〇〇二年に博士の学位を取得（博士論文「ボグド・ハーン政権と内モンゴル地域政治―一九一三年の内モンゴル戦を中心に」）、二〇〇三年から母校・内モンゴル大学で教鞭をとるようになった。二〇〇四年と二〇一一年に同大学で「中国近現代史国際学術交流」「第五回『現代中国と東アジアの新環境』国際シンポジウム」を開催、学校間交流の形式による日本と中国・内モンゴルとの学術交流を推進した。

今回の外国人招へい研究員としての研究課題は、日本における近代モンゴル関係資料の調査であるが、一年を通して大学院のゼミナール「アジア政治史」にご出席くださり、おりに触れて大学院生に対して的を射たアドバイスをいただいた。

以下、資料として掲載するのは、二〇一五年二月一四日に開催した法学会スタッフセミナー「民族から見る中国近現代史研究」の報告原稿を、周教授ご自身が補筆・改訂されたものである。この「ブフヘシクの死因に対する異論」という副題をもつ論考は、（一）一九二〇～四〇年代内モンゴルを代表する知識人・ブフヘシクについて、彼が日本人によって毒殺されたという通説に確実な根拠はない、（二）それは一九四五年日本敗戦後の内モンゴルと東北アジア国際政治の激動のなかで語られるようになった認識の「真実」であり、歴史の真実とは区別すべきである、（三）満洲国期の日本によるモンゴル社会に対する近代化作用は、歴史の真実として認めなければならない、とする。

一九九〇年代以降、台湾における競合的政党政治とエスノ・ポリティックスの展開は、日本による植民地統治半

世紀の軌跡を近代化と日本化に弁別し、前者の摂取と後者の拒絶という選択を台湾社会が主体的に行ったとする理解を生んだが、戦後七〇周年にあたる今日、こうした見方と通じるような論点が近代内モンゴルの変容として提示されていることの意味は大きい。